

間接的に訪日を希望 台湾の李登輝前総統に聞く



李登輝前総統

台湾の李登輝前総統(80)が終戦記念日を前に、台北市内で京都新聞社のインタビューに応じた。戦前、京都帝大に学ぶなど親日派で知られ、日本陸軍少尉として終戦を迎えた李氏は、精神面の重要性を指摘し、日本は道徳体系を持つべきだと強調した。また「松尾芭蕉の『奥の細道』の足跡をたどるのが夢だ」と述べ、間接的に訪日を希望した。(東京支社永島宣彦)

—終戦記念日に日本人に何を考えてほしいか。

「終戦とともに名古屋から京都に戻り、広島や佐世保、東京に行った。焼け野原を見て、日本の若い人は何をし、環境を取り戻すにはどうすべきか、と考えた。国は産業やインフラなど力がないといけませんが、日本は復興をやり遂げ、国を強くした。その代わり、精神的な面をなくした」

「日本は経済が強くなり、世界的な競争の中できつい目にあっている。こういう状態の時には精神を取り戻さないといけない。そして、日本の国力をどう変えていくか。戦後58年間に日本人が努力してきたことを見つめ直し、これから何が重点になるか考えるべきだ。精神がなければ物質だけでは駄目だ。もう1度『日本とは何ぞや』『日本人とは何か』を考えてほしい」

—日本には閉塞(へいそく)感が漂い、精神的なバックボーンを失っている。「武士道は最高の道徳規範」が持論の立場からどう

見る。

「気になるのは、若い人に道徳体系がないことだ。台湾でも同じだが『国家なんかいらぬ』『個人でやっていけばいい』との考え方が強い。今は自由に物事を選択できるが、選択には基準が必要だ。それが道徳体系、日本精神だ。武士道の精神の中には大きな特徴がある。儒教の仁、義を超えた『誠』だ。日本人の精神で1番高いものだ。そうした道徳体系、社会に奉仕する気持ちを持つ必要があると思う」

—台湾の将来は。

「台湾の主権は個々の人民の手にある、と言わざるを得ない。民主化して、総統も国会議員も人民が選んでいる。将来の問題をどうするかは、非常に時間がかかる。その前に台湾に対するアイデンティティをよく教育しておかないと、国際的にも法律的にも処理することは難しい。台湾が将来、1つの国として立っていくには、若く強いリーダー、国家の総目標、人民の団結—という三つの要素が必要だ」

—総統時代から国連加盟を目指してきた。

「現段階では難しい。台湾が国として認められていないことと、中国が常任理事国で拒否権を持っているからだ。台湾は中国よりも民主的な国になっているが、憲法、国旗、パスポート、国籍など未解決で難しい問題も残っている。1歩ずつやらねばならない」

—「奥の細道」の旅にこだわりがあるが。

「(旧制)中学時代に俳句が好きだった。芭蕉の句の意味を知るため現地を見たい。日本人の心であるわび、さびなど他国の人が理解しにくい面を、私が

外国人の立場として実際に歩いて書いたら、世界の人が理解するのではないか。ただ、私の身体の状態がよくないのが心配だ」

－昨年、訪日の予定だったが、外務省はビザを発給しないと通告した。

「日本は独立した国なのに自主性がない。官僚の考え方が古い。世界は変化しているのに、形式的、理論的な頭で昔も今も同じように考えている。変化の中で自分を見失い、どうすべきか分からなくなっている」

－京都の思い出は。

「夏は暑く、冬は寒かった。戦時中なので食事にも困った。ただ、宮本武蔵で有名な一乗寺の下り松など名所旧跡はよく歩いた。京大の卒業生らが私を日本に迎える会を作ってくれている

▽李登輝氏の略歴

1923年生まれ。台湾出身。日本植民地下の43年京都帝大入学。戦後、台湾大卒。同大助教授を務め、72年行政院(内閣)政務委員となり政界入り。台北市長、台湾省政府主席などを経て84年副総統。88年の蔣経国総統死去で総統に就任、国民党主席も務める。96年初の総統直接選挙で圧勝し、民主化を進める。2000年退任。(京都新聞)

[8月14日20時33分更新]